

■ 2009年度 入試問題分析シート ■

慶應義塾大学

法学部

科目

英語

総括

試験時間	80 分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	200 点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

大問数・出題形式・全体の分量は昨年とほぼ同じ。全体的な難易度にも大きな変化はない。本格的な読解力が要求される問題であることは、ここ数年変化がない。一部の選択肢に判断の難しいものがあり、効率よく解答しないと時間がかかる。

〈特記事項・トピックス〉

Ⅱでは選択肢群の数が3から5へ増えた。

Ⅲは昨年の物語の要約文が姿を消し、標準的な評論文になった。

〈合格への学習対策〉

Iのアクセント・文法問題に関しては、さほど難解な問題ではないので、標準的な学力を身につければ十分対応できる。試験問題全体の分量が多いので、日頃から多くの英文を読むと同時に、直前期には時間配分の練習も不可欠である。また普段から単語のアクセント等にも注意しながら、語彙を増やしておく必要がある。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	分野・テーマ(表題)	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
I	選択	アクセント・文法	いずれも標準レベルの設問	標準
II	選択	読解(会話文, 空所補充) 「『もの忘れ』をめぐる会話」	選択肢群の数が増えたが、特に難問は見られない。	標準
III	選択	読解(評論文, 空所補充・下線部説明) 「書評について」	オーソドックスな問題ばかり。	標準
IV	選択	読解(インタビューの書き起こし文, 質問文と応答文の組み合わせ) 「ミュージシャンへのインタビュー」	選択肢の数が多く、一か所間違えると連続して間違え易い。	標準
V	選択	読解(論説文, 内容説明・内容一致・整序英作文) 「豊かさと幸福の関係」	パラグラフ毎に設問が設けられている。紛らわしい選択肢がいくつかあり解答をしぼるのに苦労する。最後の整序作文も難しい	やや難

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階(難・やや難・標準・やや易・易)で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。